

第一四五回 江戸東京フォーラム (公開フォーラム)

「遺跡から江戸の生活文化を探る―江戸考古学最新情報―」記録

日時 二〇〇〇年十二月二日(土) 一七・三〇～二〇:三〇

会場 江戸東京博物館会議室

企画趣旨・紹介 二

企画趣旨説明 「いま、なぜ江戸考古学か
―地域のキュレーターを集めて―」 波多野 純 三

主題解説 「江戸考古学の多様な成果と展望」 小林 克 四

講演(一) 「江戸の開発と環境」 後藤 宏樹 六

講演(二) 「江戸の西縁」 棚木 真 二二

討論 (司会) 小林 克 一九

江戸東京フォーラム話題一覧 二四

主催 財団法人 住宅総合研究財団

企画趣旨

明治時代以来、考古学の発掘調査は原始古代を中心に進められ、近世が対象となることは少なかった。近世考古学が注目されるようになったのは、ここ二〇年のことである。特に江戸には、当時の町屋や武家屋敷がほとんど残っていないため、江戸時代の住空間、さらに生活文化を知るには考古学の成果に頼らざるを得ない。

各区や東京都による江戸の発掘成果は、建物遺構（礎石・穴蔵）のみならず、上・下水施設や護岸などを含めた生活・都市空間の解明、陶磁器・土器の分析による生活文化の解明など多岐に及んでいる。

しかし、優れた遺構であっても、発掘調査終了後には破壊され、新たな建物が建設されるのが通例である。国民的課題にでもならない限り、保存されることはない。また、考古学以外の研究者が考古学の成果を援用しようとするれば、情報に神経をとがらせ遺跡見学会に足を運ぶか、報告書に頼らざるを得ない。

本フォーラムでは、最前線で発掘に取り組んでいる地域の専門家に、近年の発掘成果を発表していただき、さらに広い分野の研究者がその成果を活かせるよう、学際的に討論したい。

また、参加者にとって、考古学が身近なものになるきっかけにもしたい。

紹介

■波多野 純（はたの じゅん）

日本工業大学工学部建築学科

経歴：神奈川県（一九四六年）生まれ／東京工業大学理工学部建築学科卒業／工学博士

著書：『江戸城Ⅱ（城郭・侍屋敷古図集成）／「復原・江戸の町」／「都市と共同体」下（共著）

／「The Buddhist Monasteries of Nepal」（共著）／「江戸名所図屏風の世界」（共著）など

受賞：日本建築学会賞（業績）／建築史学会賞

江戸の武家屋敷の都市史的研究、絵画史料による江戸の都市景観の復原的研究、ネパールにおける仏教僧院の研究と保存にたずさわる

■小林 克（こばやし かつ）

東京都江戸東京博物館

経歴：新潟県南魚沼郡塩沢町（一九五九年）生まれ／日本大学史学科卒業／日本大学大学院

史学専攻修士課程修了

著書：『甦る江戸』／『続 美術館・博物館は

『いま』』／『日外教養選書（共著）』／『掘り出された都市—江戸・長崎・アムステルダム・ロンドン・ニューヨーク企画展』／『あかりの今昔

—光と人の江戸東京史』／『読書案内 大江戸を知る本（監修）』／『江戸文化の考古学』（共著）／『真砂遺跡（発掘調査報告書）』／『今戸

焼（調査報告）』

近世考古学から出発し、江戸・東京の物質文化、生活文化の実態について研究中

■後藤 宏樹（ごとう ひろき）

千代田区立四番町歴史民俗資料館

経歴：熊本県熊本市（一九六一年）生まれ／東洋大学文学部史学科卒業／國學院大学大学院

文学研究科考古学専攻修士課程修了／千代田区教育委員会

著書：『江戸遺跡出土食器の変化と特質』／『國學院雑誌』Vol.93 No.12／『民具学と考古学』『民具マンスリー』Vol.25 No.3／

『博物館における文化財情報システムについて』／『國學院大学博物館学紀要』／『発掘

が語る千代田の歴史』（千代田区教育委員会発行）（共著）／『大江戸地下探検—遺跡にみる江戸』『図説大江戸ウォーク・マガジン 別冊

歴史読本』

江戸遺跡から都市江戸の開発を探る

■榎木 真（とちぎ まこと）

新宿歴史博物館

経歴：静岡県浜松市（一九六三年）生まれ／立

正大学文学部史学科卒業／財団法人 新宿区生涯学習財団新宿歴史博物館学芸員

論文：『発掘調査を通してみた文献史料—寛永十三年外堀普請と周辺地域への変化』『地方史研究』No.270／『寺院と墓地—江戸の中

小寺院—』『季刊 考古学』No.53

近世考古学から出発し、江戸・東京の物質文化、生活文化の実態について研究中

企画趣旨説明

いま、なぜ江戸考古学か

—地域のキュレーターを集めて—

波多野 純



波多野でございます。今日は、「江戸東京フォーラム」においていただき、ありがとうございます。江戸東京フォーラム委員では、今年度の企画の中で、是非近世考古学をとりあげてみたいと考えました。考古学の世界では、原始・古代など古い時代を扱うのが学問の王道だという時代が長く続いておりました。「江戸を掘る」ということ自体が、決して学問の本道ではない、というのが二〇年前までの状況だったと思います。それが今では「江戸を掘る」ことが、重要な学問分野として認められつつあります。

私自身は建築の歴史を勉強していますが、江戸時代の建物、特に町屋は、東京二三区内では一桁という程度に、すでに減ってしまいました。江戸時代の建物はこれからも少しずつ見つかるでしょう。しかし、見

つかる速度と壊されていく速度の競争のよ
うな厳しい状況です。このような状況下で、
発掘調査で見つかるものは、本物の建物の
一部ですから、江戸の建物を調べる上でも
考古学の成果は重要な意味を持ちます。

「江戸東京フォーラム」は、学際的にい
ろいろな分野の方にお集まりいただいて、
勉強をしています。考古学の専門の人たち
もいろいろな情報がほしい、その他の分野
の人々も考古学の情報がほしい。考古学を
素材に、いろいろな分野の方々に協力をい
ただいて、江戸の姿を甦らせることができ
ればと、本日の企画を立てました。

最近、面白い経験をしました。ここ数年、
「金沢の城と城下町」の共同研究に参加し
てまいりました。ごく最近、金沢城の一部
で、慶長期の石垣築造過程で用いられた、
俵に土を詰めた土嚢が発掘されました。ま
さに四〇〇年前の古い俵が縄目まできれい
に発掘されました。私には、発掘調査にお
いて、土の色を見分ける力はありませんが、
俵の中の土の色と外の土の色ははっきり違
いました。

その話を発掘担当者たちとしていたら、
「波多野さんが前に書いたものを参考にし
たよ」と言ってくれて、ものすごくうれし
かったのです。何を書いたかと申しますと、
港区郷土資料館が寄託を受けた絵巻につい
て書いたのです。お台場を築造していくプ

ロセスが、順番に描いてあります。東京・
品川のお台場だろうと、期待したわけです
が、「薩摩のお台場だろう」という結論に
なりました。

まず、海の中に棧橋を築いて、矢板を立
て、その中に土を入れ、水を汲み出し、や
がてできた地面の所で石垣を築いていく。
土嚢を積む様子も示されていますし、色の
違う帽子で組分けされた人夫が帳場分けし
て働く様子も分かります。

東京の港区教育委員会が出した報告書
（『台場—内海御台場の構造と築造』二〇
〇〇）を、金沢の方たちが使ってください
たことが、大変うれしかったのです。

このように、考古学の人たちは、様々な
情報をほしがってられます。今日おいで
いただいた方たちに協力していただいて、面
白い情報が交換できれば、このフォーラム
趣旨はほとんど果たせたいと思います。

考古学では、土層の色を見分けて、「こ
こから盛り土」などと教えてくださいま
す。教えてくださった上でも、門外漢の私
が見たのでは、どこが違うのかよく分か
らない。「土層の見分けがつかずと、発掘担
当者としてひとまず一人前になる。すると、
世の中が見えなくなる」というのは、考古
学に対する誉め言葉です。

考古学の成果を私たち共有のものにした
い、それが今日の趣旨です。

主題解説

江戸考古学の多様な成果と展望

小林 克



■江戸考古学の歩み

私は、江戸東京博物館で学芸員をしております小林と申します。学生時代から、文京区や千代田区の竹橋遺跡（近代美術館がある所）で、発掘に携わってまいりました。考古学の中で、近世というところ、いまから二〇年程前までは、たいそう新しいという意識があります。近世考古学、江戸の考古学は、考古学の中でも以前は特殊でした。まず、簡単に江戸の発掘の歴史をお話します。二〇数年前に都立一橋高校の発掘調査がありました。それをまとめて、東京都の古泉弘さんが『江戸を掘る』という本を出版されました。当時、私は大学三、四年生だったので、びっくりしました。と申しますのは、出土遺物は見たことのないようなもの、また、民具研究の観点からしても、全く分からないようなものもありました。この本が、民具研究や歴史学の

江戸研究などに与えた影響は非常に大きかったと思います。

その後、一九八〇年代の中頃、ちょうどバブル景気と重なって、都内の再開発が盛んになります。それに伴い、東京都心部の発掘も数多く行われるようになりました。一、二年前からは、江戸にとって非常に大事な中央区でも、発掘調査が盛んに行われつつあります。その一つが、外国人居留地があった「明石町遺跡」です。

千代田区では江戸の町屋が発掘されつつあります。また、中央区では日本橋の東急のあった辺りが発掘されました。

考古学というのは、基本的に発掘調査をして報告書を作ります。報告書ができるとその内容は、調査を担当した調査団や学芸員の基本的な判断ということになります。これは非常に大事なことです。注目される遺跡とか面白いものが出ると、新聞発表をします。すると、その遺跡の時代についていけば権威のある研究者が、「これはこうだ」というコメントを出される。さらに、それがいろいろな本に載ってしまふ。発掘担当者がきちんとそれを解釈する以前に、有名な先生が発表して、それが既成事実として歩き出すということがあります。これは慎まなければならぬと思います。それはさておき、江戸の発掘が近年盛んになって、いろいろな事実が分かってきました。

した。また、江戸の発掘は、中世や明治時代もその対象です。文化庁の通達では、近代は対象外ですので、学問的には大変な部分もあります。しかし、発掘をしている学芸員は、中世からの繋がりを考えて発掘をしていると私は見えています。発掘調査というのは、近世が主体の遺跡でも近世だけではないのです。これは発掘調査の特質として認識していただきたいと思っております。

■学際的研究の方法

諸分野との提携も大切で、特に文献史学や建築史は、遺跡を捉えるときに重要になります。第一段階の発掘調査時に重要になります。発掘調査が決まり、発掘をしますが、その遺跡はどういった所なのか。例えば、出土した遺物はこういったものなのか、という第一段階での情報を収集する中で、文献史学や建築史の内容が非常に参考になります。

新宿区では、調査の段階から文献史学や建築史の研究者に入ってもらっています。礎石が出たとか、石垣が検出されたという時点から、一緒に調査をしています。これがいちばんよい形です。

科学的な分析をするのも、第一段階、つまり、発掘現場での共同調査が必要になるでしょう。このことは実際に行われつつあります。このようにしますと、第一段階か

ら仮説が出て、その仮説について、考古学、建築史、いろいろな関連諸分野の人たちで議論をすることができます。議論をした上で、この遺跡の解釈はこうだ、この遺構の解釈はこうだと検討していきます。例えば、「汐留遺跡」は東京都の埋蔵文化財センターが掘っていますが、明治になっても、一部分は江戸時代と同じ木樋の上水道が出てきます。そこに鉄パイプを繋いだ上水道が出てくるのです。

江戸を発掘しますと、大体どこの遺跡でも地下室という遺構が出てきます。地下室については文献史的な研究事例は皆無でした。それで、私は以前、少し調べて、論文を書きました。そのあと、文献史学の小沢詠美子さんが詳しく調べられました。そうしますと、文献も多く出てくるのです。そういった意味でも、発掘時の共同調査で、権威のある先生が「これはこうだ」という判断をするのではなく、そこに関連する文献はどうか、関連する絵図面はあるのか、そういったところからの共同調査が必要になるだろうと思われまます。

江戸全体を一つの都市遺跡と考え、いろいろな発掘調査は地点なのだという認識がありました。これは基本的に私も正しいと思います。例えば、赤穂城や小田原城下と同じような形で江戸城、江戸城下を捉えるというスタンスです。しかし、発掘調査が

進んでくると、江戸というのは巨大であり、それだけではないけないのではないかという思いも持っています。

■地域から江戸東京へ、そして中世、近代へ

千代田区とか新宿区の発掘では、地域の特質が強く見えてきます。赤穂城や小田原城下などを掘っていますと、狭い区域の中で、寺社地域とか、職人たちが集まっている地域などが分かりますが、江戸の場合は、もう少し巨大な一つの地域の中で、地域は、どのような性格なのかをきちんと捉えていく視点が大事なだろうと思われまます。

のちほど、新宿区の榎木さんから、そういう視点で講演をしていただきます。発掘調査と「四谷塩町文書」を照らし合わせると、どういことが分かるのかを発表していただきます。

一つの遺跡を発掘して解釈する。遺跡を解釈したあとに、遺跡の歴史が明らかになつてきます。いくつかの遺跡から、一つの地域、いろいろな地域の歴史を考えていく、そういうスタンスが必要なんです。

江戸の考古学の中で、いろいろな成果が明らかになってきています。埋立ての方法はどういうものだったのかとか、土手をつくったり、台地の高い所から低い所へ土を回したりといった大規模な土地の改変、ま

たそれに伴う土木技術なども明らかになつてきています。地震とか、地震に伴う液化の跡なども出てきております。科学的な学問分野との連携によって、いろいろなことが明らかになってきています。

考古学というのは時代を超えられるのだと思つています。近世と近代の歴史学者たちは、交流があまりないようです。それこそ「江戸東京」という発想がある方は少ないようです。考古学で地域を考え、江戸東京を考えていきますと、中世から近世、そして近代をきちんと捉えていけるのではないかと思つています。

波多野先生がさきほどおっしゃったようにするためには、実は非常な苦勞がいります。出土遺物にはなり得ますが、本物の歴史的な資料にするためには、ちゃんと発掘が必要です。また、費用、期間といった問題もあります。そうした問題を、何とかクリアしながら、よりベターな発掘をして、その中から、どういうことが分かってくるのか、このフォーラムでは、そんなことを話し合いたいと思ひます。

なお、地下鉄の市ヶ谷駅の構内に、発掘された遺構が展示、再現されています。近世都市、江戸というのは、我々の住む東京と接続しているわけですから、そこで出てくる遺構、遺跡も現代の町づくりの中に活かしていきたいものだと思います。

講演(一) 江戸の開発と環境

後藤 宏樹



■「江戸」発掘調査の意義

千代田区の教育委員会からまいりました後藤と申します。いま波多野先生、小林さんから、江戸の考古学が脚光を浴びているとお話でしたが、近世の考古学というか、発掘は、行政的にはまだまだ認められていない状況にあります。

なぜ近世の発掘が必要かを最初にお話しします。大風呂敷を広げるわけではありませんが、IT革命などで情報、物、人のあり方が変わってきて、おそらくこれから都市のあり方も変わっていくだろうと思います。二一世紀には世界人口が六〇億人を超え、その半数が都市に住むという時代になります。世界的に都市の重要度が増してきています。最近、東京都でもさまざまな検討が行われているようです。そういったことを考えますと、江戸東京という都市が四〇〇年持続していることを、私たちのやって

いる発掘調査からも、きちんと把握して伝えなければいけないということが、まず一つあります。

もう一つ、考古学をやっている者としては、都市の遺跡が考古学を牽引してきたという実態があります。縄文都市と呼ばれる三内丸山を都市というかは別としまして、人が多く住むという意味では、三内丸山、吉野ヶ里、平城京、平安京、それから鎌倉に至るまでの都市遺跡は、きちんと発掘調査がされています。しかし、近世都市は全く考古学的に検証を得ないままなくなってしまうかもしれません。現在の大都市の大半は城下町に起因していて、それらは、四〇〇年前の近世初期の慶長期に築かれた都市です。このままだと、近世遺跡の発掘調査による今に繋がる都市の歴史が、おそらくは分からなくなってしまうという危機感があります。そういう意味で、行政の中では、近世はなかなか受け入れてもらえないのですが、近世の発掘を続けていかなければならない意味合いがあります。

■「江戸城」の発掘調査

私は千代田区で仕事をしている関係上、「江戸城」は、避けては通れない事柄です。今日は江戸城の築城から、都市を築くという意味で城下町の構築をお話しします。江戸の都市がどのように居住空間を形成して

いったのかという点と、大規模に造成して開発していくのですが、開発に対する災害や環境変化なども、合わせてお話をします。まず、江戸城と全国主要な城郭の大きさの比較をしますと、一目瞭然で、江戸城の大きさが分かります。江戸城は内郭と呼ばれる本丸、二の丸、三の丸、西の丸、吹上、北の丸だけで、二四ヘクタールという規模を誇ります。さらに、皇居外苑の西の丸下から丸内の大名小路もあり、その周りに一回り大きく取り囲こむ外堀、溜池、神田川、隅田川が大きな骨格になります。今日は、この中の地域(図1)についてお話をします。

江戸城は北から張り出した本郷台地、その末端の駿河台の地形にあります。西から

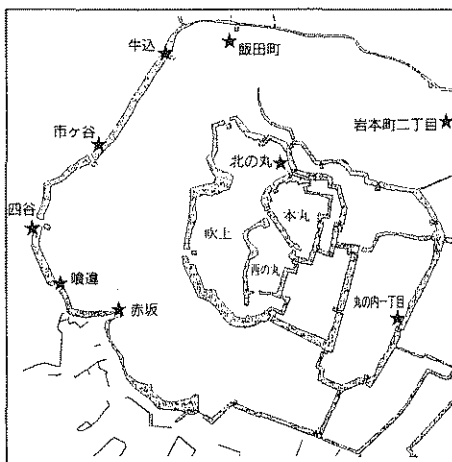


図1 遺跡位置関係図

延びる麴町台地（淀橋台ともいう）が江戸城外堀内に位置しています。その麴町台地の突端に江戸城が築かれています。城の前には日比谷入江があつて、入江に突き出した半島状の砂州が江戸前島です。河川としましては、平川（神田川は千代田区に入ると「平川」と呼ばれる）と石神井川が城の近くをかつては流れていました。そして、古代の主要道である東海道、中世の鎌倉街道などが、江戸城の近くを通過していたと考えられています。江戸城直下の中世遺跡では道路跡や集落跡なども出てきています。

こういう地形的な条件のもとで、慶長期から、約半世紀をかけて三代家光まで江戸城が築かれていくのです。近年、江戸城中の調査をする機会がありました。その調査を通して、江戸城は自然地形を巧みに利用していますが、逆に大規模に造成していたという側面もあるのではないかと考えるようになりました。

江戸城内で、三か所の遺跡調査を行いました。その一つが北の丸にある国立近代美術館遺跡です。この遺跡は、現状では標高一〇〇〜一五メートルぐらいですが、実は江戸初期に大規模な盛土をしていたのです。本来、標高は、それこそ〇メートルに近い沖積地であつたものを、築城の中で埋立られていたことが確認されました。

江戸城内の地形断面想定図をご覧ください

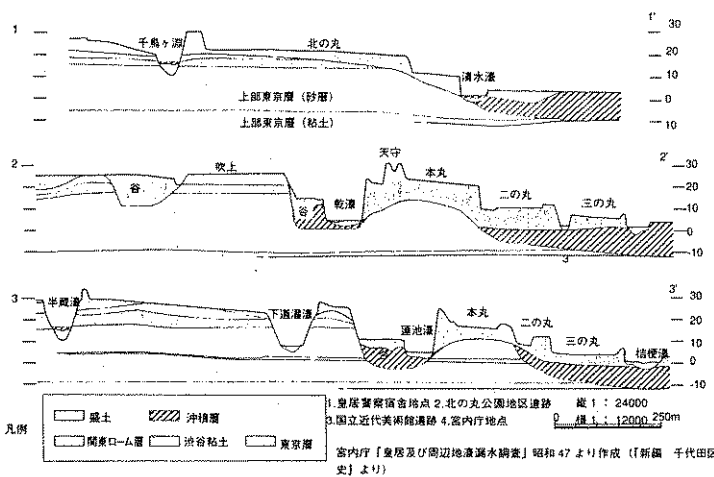


図2 江戸城内の地層断面想定図

い（図2）。吹上が台地上にあります。最近、調査をしましたところ、だいぶ削られた跡が見られました。本来はもっと高い地形だったのでしよう。それが標高二五メートル程度まで削られているのが分かります。問題は、本丸、二の丸、三の丸があるところですが、一〇メートルぐらい盛土を

されているのではないでしようか。本来は標高一〇メートル程度の台地で、二の丸、三の丸は沖積地が広がるような地形にあつたと思われます。江戸城の縄張りが、台地の縁辺と言われているのですが、むしろ、沖積地に大規模に造成をかけて築かれた土地ではないかと思われます。信長、秀吉以来、城郭が築かれています。山城といった戦国期の高台の城から、経済的な効果を狙う城郭に変貌する、その集大成が江戸城だったのでないでしようか。江戸湾と河川を利用した交通を重視しながら、築城していく姿が、もしかしたら家康の頭の中にあつたのではないでしようか。慶長の初めごろには、道三堀、小名木川が開削されます。江戸城を整備する中で経済に力点を置いた家康の都市づくりみたいなのが見え隠れします。いま述べました沖積地に張り出すような縄張りも、もしかしたらその一端として現れているのかもしれない。

私は「大江戸地下探検」という文を書きましたときに、江戸城の本丸、二の丸、三の丸、北の丸の一部を埋め立てた土量をザツと計算しました。埋め立てに使った土は、二五〇万立方メートル、一〇トンのダンプカーで四〇万台になりました。

次に、江戸城の外堀についてお話をします。外堀は、神田川や溜池の谷を流れていた河川を利用して築かれています。神田川

の下流域である平川は、雉子橋から神田橋、鍛冶橋に繋がる外堀（現在の日本橋川）として利用されていきます。この沿岸域で遺跡調査をしましたところ、本来の平川は外堀よりも西側を流れていたと推定されました。そして神田川の支谷を利用して、牛込から四谷へ延びる外堀が築かれています。一方、南側の外堀となります「溜池の谷」は、もともとは鮫河橋という新宿区の四谷の近くを起点とする谷（河川）で、その谷も利用しながら、外堀が築かれています。「地下鉄七号線（南北線）」建設に伴って外堀の各地点が発掘調査されました。市ヶ谷駅には、小林さんから紹介がありましたようにその展示があります。いくつか紹介しますと、まず新宿区で調査された市ヶ谷での堀に面した土手の遺跡です。外堀は谷を利用していますが、もともとの谷を城側（千代田区側）に寄せて外堀を築いています。その結果、堀を築くにあたって大規模な盛土あるいは切土（土地を削る）という行為がなされています。その中で、無理に谷を埋め立てることもあったようです。土手にいくつも崩落した痕跡が出てきています。市ヶ谷でもそうですが、喰違土橋でも大規模に地滑りがした跡らしきものも出ています。そして、土手を再度、築き直しています。土手の内部に排水施設を設けたり、あるいは杭柵や石垣を埋め殺しにし

て土手の強化を図ったりしています。近世を通じて、土木技術が向上していったことが分かってきています。市ヶ谷の堀では、この堀に流れ込む谷筋みたいなものがあります。その部分が集中して崩落しているのではないかという所見が得られています。開発に対する自然への対抗と災害の関係が把握された例といえましょう。

外堀のもう一つの特徴は、総城下町として、「天下普請」によって、全国の名を動員して築いたことです。その状況の一端が、丸の内一丁目遺跡で具体的にうかがわれます。この遺跡は鍛冶橋門の近くにあつて、外堀石垣が発見されました。この地域の堀には、「丁場割図」という寛永一三年（一六三六）の外堀普請で完成した竣工図が残っています。その一部が図3で、四家の大名家が集まって、いわゆるジョイントベンチャーで、一気につくり上げたことが分かります。堀石垣は松平新太郎（岡山藩池田家）が組頭となり、その配下というかその組は、豊後佐伯藩毛利家、備中成羽藩山崎家、豊後岡藩中川家が普請区域に携わっています。遺跡調査では、大体一〇〇メートルの石垣を調べました。「丁場割図」と発掘成果によって、各大家の丁場を割っていくのに、現場では石垣下の土台木を基準にすることが分かりました。土台木が丁場境でびったり切れていましたから、

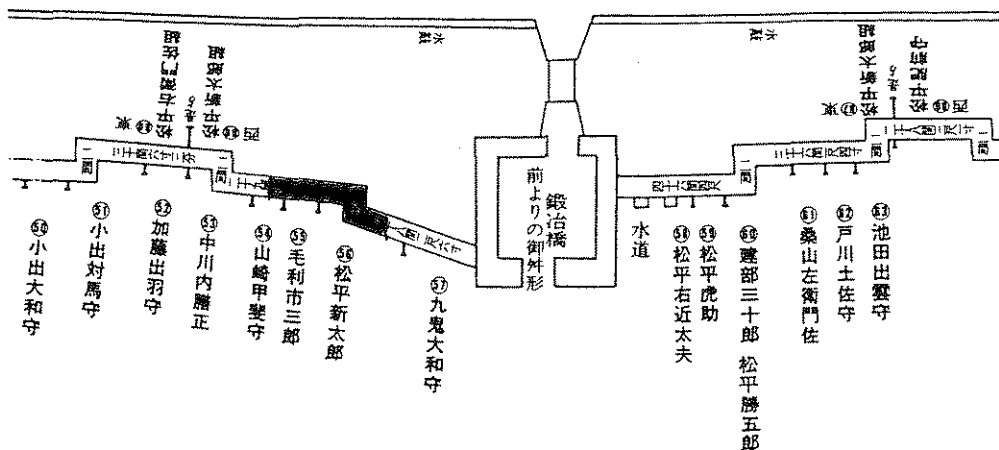


図3 「丁場割図」(調査地は黒塗部分)

石垣を築く前の土台木を置く時点で丁場を割っていたということが分かったのです。さらに、毛利家の普請区域は「◇」の刻印と矢羽の刻印がありました。山崎家の刻印はいちばん明瞭で、「○に山」です。中川家は串団子です。各普請区域で石垣表面に付される刻印が、各々異なることが確認されています。これは大坂城内での大名家による刻印と共通していますから、これらの刻印が普請した大名家を示していることは、ほぼ間違いないだろうと思われれます。その中で、「◇」刻印が普請丁場を越えて出ていることに着目しなければなりません(図4)。この刻印は組頭の松平新太郎である岡山藩池田家のものです。つまり、基本的には組頭が組全体の石材調達をしていたことが分かります。調達時点で刻印を付け、さらに、普請時に各大名が築く段階でも刻印を打つたことが分かります。そうしますと、毛利家では、石材を池田家からいっばいもらっているということが分かります。山崎家も「山」の前に「◇」が刻まれています。石切丁場を調達するには大名の力を借りなければならなかったと思われる。組はこのようなことも考慮して編成され、組頭がおかれたと推定できます。そして、丁場境では隣り合う大名が協力して順序よく石垣を積んで、帳尻を合わせていることも確認できました。

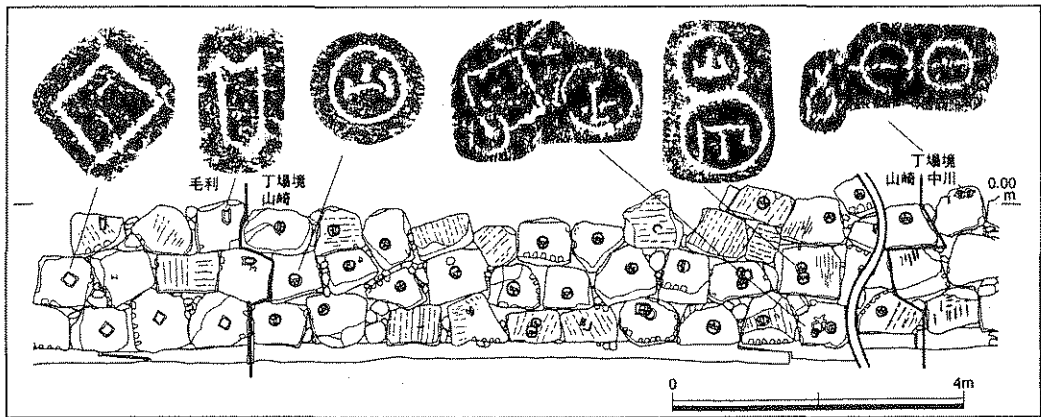


図4 丸の内一丁目遺跡の石割刻印

また、信長以後の石垣の積み方は野面積み(のびま)といって、石の本来の大きさに応じて積んでいるのですが、この時期になりますと、いわゆる間知石(かんちいし)的な、四角錐のような石に変ってきます。それぞれの石の大きさや形が似てくるのが、寛永一三年の特徴ではないかと思っています。天下普請という事は、各大家の持っている石工の差もありますし、技術の差も大きいと思いますが、それを調整するために石を規格化していく方向が、築城の最終段階である江戸城で確立されたのではないかと思います。記録だけでは、天下普請がつかめなかったのですが、発掘調査を通して実際の工事を見ることで確認できた例です。

■「溜池」の発掘調査を通じた開発と環境問題

次に溜池のお話をしなければなりません。溜池の谷に関して、三か所の遺跡が発掘調査されています。この調査には、自然科学の研究者にも加わっていたので、本来はどういう自然環境だったのか、それが江戸時代にどう変わっていったのかに、主眼をおいて調査を行いました。有史以前は湿地環境にあったような土地が、一四世紀〜一五世紀、後北条時代ぐらいに、水田が営まれたことが分析から分かりました。

後北条期に、江戸衆というのが「小田原

所領役帳」に見られます。これに、桜田など、いくつかの地名が溜池の谷周辺に見られます。ですから、村の一角が溜池の谷辺りにあって、この村では水田を営んでいたのかも知れません。それが戦国、あるいは江戸初期になると、河川を止めて池的な環境、いわゆる溜池的な環境になったのではないのでしょうか。そして一八世紀の初めに江戸初期の川が流れるような環境から、一転して汚水が流れ込むような環境になったことが分かりました。

発掘調査の成果と合わせて考えますと、溜池の遺跡では、一八世紀の初めごろに大規模な造成を行っています。それも貝とか木材、ゴミなどが混在した小汚ない土で造成しています。この造成によって低地でも人が住める環境を築いていたことが明らかになりました。溜池の谷の支谷内にあたる和泉伯太藩上屋敷跡では、もう少し古い寛文年間（一六六〇年代）に大きな土取穴をつくって、屋敷内を埋め立てて屋敷全体の宅地化利用を図っています。一六五〇年代の正保期の絵図面には遺跡地が空白となっていることから、おそらく一六六〇年代ごろから徐々に谷間の宅地化が進んでいったのだろうと推定されます。

文献史料では、溜池沿いの町は寛永期頃から次第に開発され、最も溜池際である赤坂田町は、『御府内備考』によると、一六

六〇年代に起立しています。つまり、明暦の大火以後、都市化のために徐々に開発が行われ、史料では水際は一七世紀後半と確認できますが、実際はこの頃からで、一七世紀末とか一八世紀の初めごろに宅地として完成したと考えられています。

余談になりますが、自然科学分析の成果、発掘成果、地質調査等によって、本来の谷の最も低い地点が、近世の溜池よりももう少し南側に位置するものと考えました。そして、溜池は人為的に築いたもので、池と平行して流れる大下水辺りが本来の川筋と考えられ、さらに南側には上水道があり、吐樋によって大下水に余水を流し、大下水は溜池に注いでいました。このことから、江戸城外堀は、上水や下水の捌け口といった水回りの役割もしていたようです。溜池周囲では、その南側の町屋などに取り込んだ上水が流れ、その排水や湧水、雨水などが集められて大下水として流れていき、貯水池的な機能を持つ溜池に流れています。

千代田区の遺跡を概観しますと、埋立てや土地を削った跡が各所で確認され、近世に土地造成が、かなり行われていたことが分かります。そして、一七世紀末から一八世紀代がそのピークではないかと推定しています。絵図によって外堀外に土取場が二か所確認されています。そのひとつが港区にある城山の土取場で、発掘調査

がなされています。そこでは一七世紀末から一八世紀代に、土取場が屋敷地として変化していくことが確認されています。つまり、外堀周辺では、明暦の大火以降の再開発ブームがこの頃、終焉を迎え、周辺地を宅地化するために造成土等を取っていた場所が宅地となっていたのでしよう。

■武家地・町人地の開発

讃岐高松藩松平家上屋敷にあたる飯田町遺跡の正保年間（一六四〇年代）の絵図を見ますと、遺跡周辺に堀が描かれています。遺跡からも幅一〇メートルぐらゐの堀が確認され、一六五七年の明暦の大火で埋められたことが分かりました。絵図にある堀かその堀に続くものであることが明らかになりました。先ほど波多野先生から土囊のお話がありました。ここでも、まず初めに土囊を何段か築き、水を止め、それから石垣、石組み、あるいは土留板などで築いていることが分かりました。

讃岐藩上屋敷では、先の堀を埋めた跡のグチヨグチヨだった所に一八世紀末になると、大規模な御殿が建ったようです。建物の柱跡や庭園跡が発見されました。遺構のなかに、地下室が御殿の一角に集中して出てきました。遺構周囲には、柱材などで筏状に組んだ筏地形と呼ばれる地盤工事が確認されていますから、この上に建物が建っ

ていたのかもしれませんが。

建物礎石跡としては、一八世紀代には下に砂利を敷いて地盤沈下を起こさないように根石を据えていましたが、一八世紀末の寛政期に大火災がありまして、復興後に築かれた御殿礎石には根石下に杭を打ち、礎石が沈下しない工夫をしています。杭の長さは大体三メートルで、今まで近代の構造物と考えてきたものが、江戸の後半期には、すでにこうした杭による基礎構造が出現していることが明らかとなりました。

町土地の遺跡として、岩本町二丁目遺跡があります。下水道によって区切られた幅三間ぐらゐの短冊状の区画が発見され、区画内には路地や礎石建物があり、その奥に土蔵があります。建物と下水溝の間に幅半間（九〇センチメートル）ほどの路地があつて、貝を砕いて表面に敷き詰めているために白いポツポツが見えます。そして、路地のその脇には下水道や上水道が敷設され過密状態の町屋であつたようです。

土蔵の構造も遺跡（写真1）から分かりました。一八世紀代の古い段階の土蔵では樽基礎と言ひまして、樽を伏せた状態を基礎にして礎石を上に乗せ、樽の下には土台木を置いています。それが、一九世紀代の新しい段階では蠟燭石という石を基礎とするものになつていくようです。

また、鍛冶炉ではないかと思われるもの

のが見つかっています。その炉は一間四方ぐらゐの土間の一角にありまして、炉には鉄片がいつぱい付着していました。写真2のような遺構の配置を見ますと、下水に区切られた短冊状の区画がありまして、区画内の通りに面した表には表店が、その奥には裏店と呼ばれる長屋、土蔵の跡あるいは鍛冶屋の作業場などがあつたとイメージができます。

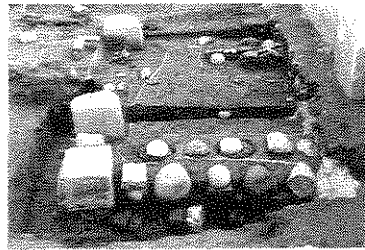


写真1

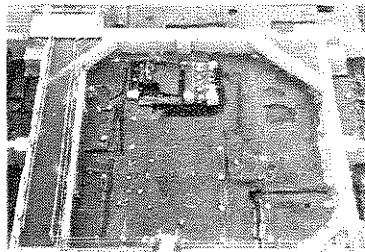


写真2

■江戸の成り立ちと変移
私の主題は、江戸の成り立ち、変移といふところです。江戸城外堀内という限定付きですが、いままで調査をやってきたイメージでは、江戸時代初期の遺跡というのは非常に少なく、例えば、大名小路の一带

とか、丸の内の一帯が主です。それも出てくる物などを見ますと、豊臣の大坂城などと比べますと見劣りがすると感じます。それが、明暦の大火後、インフラ整備等が進みます。一七世紀の終わりから一八世紀の初頭という段階になりますと、低地や谷の中まで家が建ち並ぶという都市の拡大がイメージできる形で、発掘調査の成果が出てきています。出土した陶磁器を時期ごとに並べてみますと、このころが非常に多いのです。

そして、寛政期から化政期、つまり一八世紀末から一九世紀初頭に、陶磁器の消費量が非常に大きく増加します。また、このころの飯田町遺跡では、建物の礎石や下水溝の石材、礎石下の杭といった、屋敷の基礎構造を築く建築材だけでもその消費量は、非常に多量であつたことが分かります。この時期の遺物出土量は、遺跡調査をやっている側の立場からすると殺人的な量で、一か所のゴミ穴に出会いますと、調査日程には追われる、お金はなくなるで非常に悲惨な状態になるのです。このように以前の時期に比べて遙かにしのぐ量が遺跡から出土することから、江戸への物の集積が非常に大きくなったということが推定されます。以上で、「江戸の開発と環境」についての講演を終わります。

榎木 真



■遺跡から見た江戸の範囲

新宿歴史博物館の榎木と申します。主に埋蔵文化財の調査に携わっております。新宿区は、江戸時代に限らず、縄文時代、弥生時代の遺跡もかなり多くある所です。

その中で江戸時代の遺跡を考えますときに、千代田区は、江戸城の範囲になります。新宿区は、江戸城外堀の部分で、北から牛込、市谷、四谷で新宿区の東端になります。西側はどこまで行くかと申しますと、北西端が落合という地域になります。

いろいろな工事が発生しますと、江戸時代の遺跡に限らず、遺跡があるかどうかを試掘します。そうしますと、新宿区の東側半分に江戸時代の遺物が非常にたくさん出てきます。しかし、山手線よりも西側、例えば、高層ビルなどが建っている所とか、もっと神田川寄りでは、街道沿いの一部の

地域を除けば、ほとんど遺物はないのです。それは幕末の頃、これらの部分が村、もしくは農地であったためです。

そのような遺物量の違いを棒グラフで表し、新宿区の地図に落としてみました。そのようにしますと、遺物が面積当たり、どのくらい出たかが分かるのです。遺物量が多いのが「細工町遺跡」です。ここは拝領町屋という使われ方をしていたところです。「南町遺跡」は「細工町遺跡」の半分ぐらいの遺物量で、ここは、御徒組の大縄地です。尾張徳川家の上屋敷は、発掘範囲が御殿の西側になりますが、ここはゴミ穴が多く、遺物量が非常に多いのです。「四谷三丁目遺跡」は町屋と武家地の遺跡として、ここも遺物量がやや多いところです。

こういった単位当たりの遺物出量が多いところが、いわゆる考古学的に捉えられる江戸の範囲と考えています。

■遺跡と遺物

写真1 「細工町遺跡」です。一つ一つの穴が地下室と言われる遺構で、非常に密集して重なり合っている状態です。路地になるように建物が建っていたのではないかと思われるところがあります。これらは全部同時に存在したわけではありません。こちらの地下室があるときには、こちらはまだないとか、こちらを埋めてからこちらを

掘るということを繰り返していった結果、このような状況になったのです。

「南町遺跡」では間隔が細工町よりはやや開いている感じになっています。素掘りの地下室があつて、出入りのために階段が付いています。地下室は、おそらく火事などが起きて、燃え広がる前に家財道具を一旦入れて逃げるといった一時的な耐火施設と考えられます。

写真2 「四谷三丁目遺跡」です。新宿通りに面しています。江戸時代には「四谷塩町二丁目」と言っていたところです。

この遺跡を調べてみましたところ、長屋のような建物が建っていたのではないかと考えられます。井戸があつたり、ほぼ等間隔に非常に浅いゴミ穴のような浅い窪みがあつて、辺りから貝殻などが出ています。

地下室、井戸、ゴミ穴から、多量の陶磁器類が出てきます。四谷一丁目の三次調査では、地下室から破片も含めて、磁器の碗とか、瓶、壺、皿などが出てきました。

このようにそれぞれの遺構ごとに大量の遺物が出土します。新宿区ではそれらをタイプに分けています。

写真3 皿類、碗類、鉢類、甕類、壺、瓶、播鉢などいろいろな物があります。しかも、大きいものから小さいものまであります。また、産地や時代が異なります。これらの生活用具は、それぞれの器種に対してルー

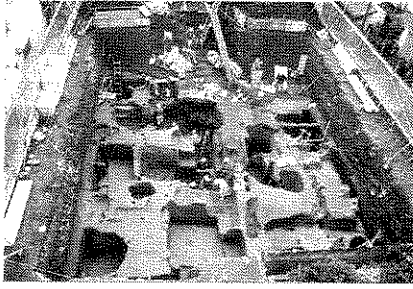


写真 1

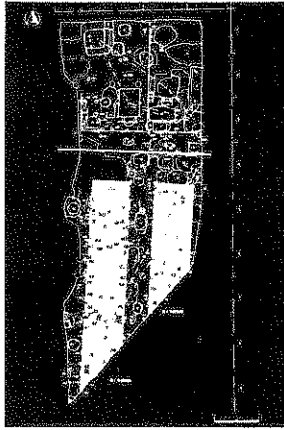


写真 2

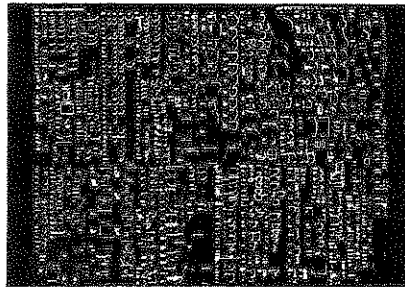


写真 3

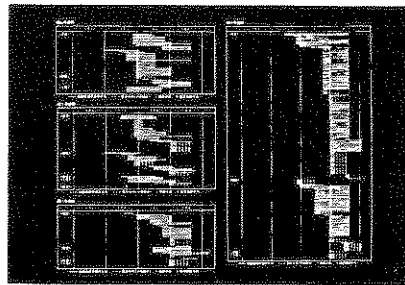


写真 4

ルを決めて数えてます。例えば、大碗の底の破片が一個あつたら、それは一個体ですが、口の部分の小さな破片だけだつたら、個体としては数えないというように集計していきます。

また同時に、陶磁器類はおよその年代が分かりますから、それらの比較もしていきます。その方法は、個々の出土品に対して、一七世紀の中ごろから一九世紀まで、ほとんど同じ形で作られていている場合は長い線になります。一八世紀の中ごろしかつくりられない形だと短い線になります。これを年代順に並べていきます。

写真 4 そうしますと、非常に多くの陶磁器の製作年代が重なってくるという現象が捉えられます。この時期までつくられている製品と、この時期からつくり始められる

製品が重なる時期があるわけです。そこから、陶磁器類が遺構に棄てられたのは、この期間だろうと想定します。

先ほど申しました陶磁器類の分類とカウント、そして廃棄年代の想定をそれぞれの遺構ごとに行つて比較をします。

ほとんどの遺跡でいちばん多い遺物は、飯茶碗という普通の大きさの碗です。これは、お茶を飲んだりするのに使われたと思われ。一方、数が少なくても必ず、かなり高い頻度で出てくるのが、例えば、播鉢とか、こね鉢といったものです。現在、皆さんの家でも播鉢が、一つくらいはあると思います。こういった器種からは、世帯数を考えることができます。

明治三九年の『婦人画報』に、「新婚生

活で整えるべき家財道具のリスト」が載っています。新婚ですから二人暮らしで、井をいくつ、茶碗がいくつと結構細かく書いてあります。これから生活を始める世帯が、最低限持つていなければならないもののリストです。飯碗は二つかというところ、そうではなくて、お客さんが来るので、最初から五つくらい持つていたりするのです。こういうリストと出土する陶磁器類の組成を比較をします。

写真 5 これは、幕末期に五〇〇石級の旗本、玉虫家が放棄した生活用品の一部です。この家は、天和ぐらいに市谷に移り住んでくるのですが、屋敷替えとか火事にも遭わず、江戸時代中、ずっとそこに暮らしていました。ほとんどまとまった遺物が捨てられるようなことはなかったのですが、幕末

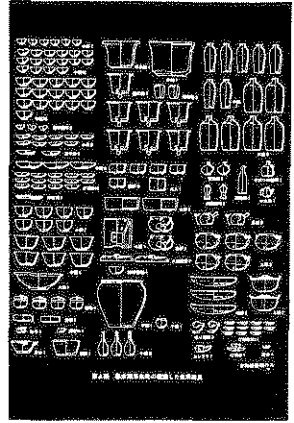


写真 5

というか明治になったとき、まとめて陶磁器類を捨てています。

この写真のような凶を各遺跡、各居住者ごとにつくりたいがために、これまで述べてきましたような作業をしています。

なぜそのような作業をするかと申しますと、まとまった遺物が出土するというのは、世帯が生活用具一式を捨ててしまったわけです。このことは、暮らしていた人たちの生活が、ほぼ断絶してしまっただけではないかと考えます。いくつかの遺跡を掘ってみますと、ゴミ穴の中から焼けた土や瓦などが出てきます。おそらく火事で焼けてしまった、もしくは相対的な被害を受けたなどといった状況が推測されます。

それとは別に、中下級武士の小さな屋敷の多い新宿区では、江戸の後半になりますと、幕臣間で非常に多くの土地の交換、「相対替」とか「切坪相対替」といった行為が行われ、拝領者がかなりの頻度でかわ

ります。このような場合にも、生活用具がまとまって廃棄されるようです。

以上のように、多くのものをいまままで使っていた井戸、地下室の中に捨てるわけですから、当然、そこでの生活は終わるということだと思います。これを「非日常的な廃棄」ととりあえず呼んでいます。

最初に申しましたが、新宿区において、遺物は東側に多く、西側は少ないという傾向は、単に東側に人が多い、市街化が始まった時期が早い、そして、それが重層的に重なったということではなく、むしろ生活の断絶の回数だと理解をしています。生活の断絶のサイクルが早いか遅いかではないかと思えます。火事で焼けてもすぐに復興するとか、また屋敷の居住者が十数年で入れ替わるといったことが繰り返された場合に、大量の遺物があったり、地面がポコポコになっってしまうような掘られ方をしているのではないかと思っています。

そうした痕跡が考古学的に市街化ということを抑えていくことになるのではないかと考えています。

最も多くのものが廃棄されたのは、幕府が崩壊した時だと思われれます。それは幕末という言い方もしていますが、基本的には明治の初頭ではないかと考えています。

こうして出土品から当時の生活用具の捨てられ方を考えていくわけですが、我々の

目的としては、基本的には各階層、身分、時代によってそういう生活道具がどのように変化していくか。また補充されていくかということだと思います。生活用具一式というのが仮にあるとすれば、これ自体は時代、身分、階層によって変わっていくでしょう。

また、例えば、茶碗は割れやすいとか、大皿はあまり使わないから割れないとか、構成する個々のものの寿命もあると思います。そのなかで、買い替え、買い足し、処分をして維持していくわけです。火事とか屋敷替えが起こった場合に、どの程度、選択の余地があるか。例えば、家が全焼して、ほとんどの物が焼ける状況では、選択の余地はありません。しかし、「相対替」などで別の屋敷地に移る場合は、必要な物は当然、次の生活のために持つていくでしょうから、不要な物だけが残ります。不要な物の中でも、再利用できる物、転用できる物、もしくは誰かに売ってしまえるような物は、持つていくでしょう。最後に残った物が捨てるを得ない物ということになります。

それらの物を屋敷内に捨てるのか、それとも外へ搬出するのかという問題があります。先ほどらい、ゴミ穴からの検討で述べていたのは、基本的には屋敷内に全部捨てられているという前提で話をしています。それは新宿区という地域性、しかも中下級の武士という特性においては、このよ

うになる傾向が強いのではないかと思つて
います。これが、例えば、下町の町屋等
ですと、船などを使うと搬出がしやすいの
ですが、船が使えないような山手の、しかも
比較的経済的に厳しい中下級の武士の場合、
幸い屋敷地は狭いものでも、三〇〇坪近く
ありますから、屋敷内で処理されるのです。

さらに、埋められたあとに、先ほどの千
代田区の例ですと、低地では杭とか木の道
具、桶などが非常によく残っています。し
かし、新宿区の場合、ごく一部の低地遺跡
を除けば、ほとんどが台地にありますから、
木のものなどは腐ってしまします。それで、
結果的に陶磁器類、瓦のみが残ります。ま
た、それが攪乱というか、後の時代、例え
ば、一八世紀に埋められたものが、一九世
紀の人によつて掘り出され、ひっかき回さ
れてしまうこともあるでしょう。そのこと
からも幸い逃がれた場合に、初めて出土品
として我々は手にすることができること
になります。

このようにしてみますと、出土品と当時
の人が使った生活用具との間には、かなり
の落差があるわけです。

陶磁器類を見て、生活用具の復元がすべ
てできるかという点、必ずしもそうではあ
りません。江戸時代の陶磁器類は、非常に
多くの器種に分化していて、生産量も多い
からです。それよりも、それらから当時の

生活の移り変わりが捉えられるのではない
かと考えています。

こういった視点で、一個一個の遺跡を掘
つていくわけです。

■四谷一丁目遺跡

「四谷一丁目遺跡」を、写真で紹介しま
す。この遺跡は堀沿いに位置し、東側は千
代田区で、南側は迎賓館あたりになります。
四ツ谷駅の北側が、江戸時代の四谷の入口
で、四谷御門がありました。調査をしまし
たのは、外堀通り、江戸時代には「御堀端
通」と呼ばれた所です。

発掘は時代の新しいものから、上から順
に調査をしていくのですが、ここでは年代
の都合から、下のほうから申します。いち
ばん古い遺構からは、あまり派手ではない
のですが、地面がうねっているのが分かり
ました。この上には粘土を含んだ砂のよう
なものがずっと敷かれています。これは
出土遺物から寛永一三年（一六三六年）の
江戸城外堀に伴う盛土であろうと考えまし
た。バックされた波状の痕跡、これは、普
請以前の畝、畑の跡だろうと考えました。
写真6 この写真は上から見たところとし
て、耕した跡が並行して平面的に出てきま
した。四谷の町は、『御府内備考』、『町
方書上』等を見ますと、外堀普請が行われ
るまでは、ほとんど原野に近いという記述

もあり、何軒かの民家は当然あったのでし
ようが、ほとんどは農地や雑木林だったと
思われます。

写真7 四谷の門ができる正面のところに、
麴室と呼ばれる羽子板状の室が、放射状
に連らなつて遺構として見つかつています。
麴室の床は、本来は地面より三、四メー
トル下になければいけないのですが、掘つて
みますと、そんなに深くないところから出
てきてしまうのです。関東ローム層の地層
の堆積の仕方等を見ますと、この土自体は
通常ならば、もっと深いところから出てこ
ないといけない地層に当たるところですが。



写真6

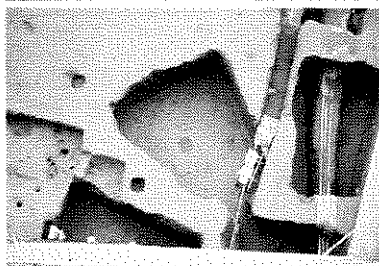


写真7



写真8



写真9

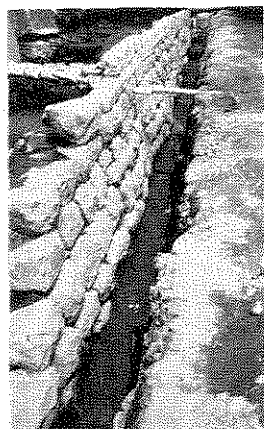


写真10

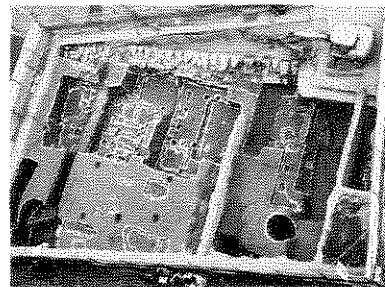


写真11

翹室というのは、翹を育てるため、保温と保湿性に富んだ施設です。そして素掘りという構造ですから、類例からは深い位置につくられることが明らかです。ですから、この部分が江戸城外堀普請において削り取られた地層だと考えることができます。この翹室から、初期伊万里、一七世紀の中ごろの碗がまとまって出ています。重ねた状態のまま出土していきまして、ほとんど使われていないのではないかという感じがします。この地下室、翹室自体が一六三六年には埋められていると思われ、一六三六年代には非常に示り示した資料かと思えます。佐賀県立九州陶磁文化館の柴田コレクションの中にほとんど同じものがあります。

このあたりの地形はもともとかなり起伏

がありまして、外堀をつくと同時に、低い所には盛土をし、高い所は削り取ったのだと思います。

明治になってつくられました陸軍参謀本部の地図を見ますと、靖国通りが走っているところが谷で、別の谷が一本、北側から入っています。江戸城の外堀はもちろんお堀を利用しながらつくっているわけですが、この谷筋はすべて堀となったわけではなく、埋められている部分や大きく削り取られている部分もあるだろうと思います。この二つの谷の間の部分が四谷塩町になります。写真8 切り土の両側に盛土が見えます。これはお堀側のほうですが、こうして土を積み上げてつくっています。先ほどの谷が斜面になっています。盛土をするときに、つき固めています。かつ、土が軟らかいの

でしようか、巻き上がってしまった状態です。ですから、つき固めながら、これを一層一層つくっているという状況が、この地層のねじれというか、皺曲したような痕跡として残っています。

写真9 これ削り取られた部分で、お堀端通りとなった、道路部分の路面です。表面にミシン目のような刻みが付けられています。おそらくこの上に砂利とか土等を敷く場合に、それらの馴染みをよくするようなものではないかと推測されています。

写真10 これはお堀に沿ってつくられた大下水と呼ばれる遺構です。大下水は明治になっても使われていますので、新しい時代に積み直したり、新しい石が入ったりしています。崩れて切り取った跡も見えます。写真11 これが大下水の脇に沿った地下室

の列で、四谷塩町の所です。大下水の近くまで掘っています。また、やや離れた南側の大下水沿いでは木枠の地下室が一基見つかっています。

写真12 この中から、鍋とか鑑蓋のようなものがまとまって出てきました。たぶん火事で焼けたのだと思いますが、そのままの状態です。

写真13 こういったいろいろな地下室が、通り沿いにつくられているのですが、ある時期を境に蠟燭石というか、礎石がつくられていきます。これもおそらく蔵の基礎だと思われる。こういう形で周囲をめぐるように基礎が設けられました。基本的に関東

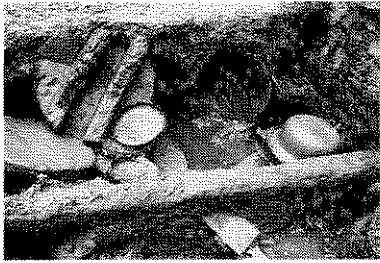


写真12

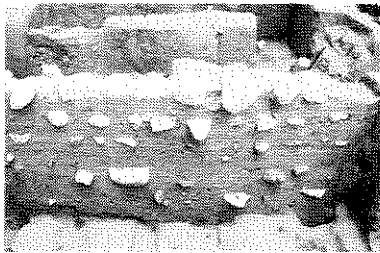


写真13

ローム層は、それほど軟らかい土ではないので、石を配置していくだけです。しかし、たまたま昔掘った地下室等に重なる部分は、埋め土ですから軟らかいです。そのときは、地下室の底から石を積み上げていくという形になります。

写真の地下室は、こういう石を敷いて、しかも何回もつき固めるという形で蔵の跡ができています。何回も石を敷いて、砂を敷いて積み重ねをしています。

四谷塩町の関係の資料は、江戸東京博物館に所蔵されています。これは、町屋の資料としては一級のもので、人別帳等もまとまっていますし、明治四年の段階ですが、屋敷の図面が大体まとまっています。

図1は、四谷塩町一丁目の発掘範囲です。図のいちばん下のほうに大下水がありまして、石が並んでいます。そこに一八世紀代には地下室が並んでいました。さらに一九世紀に入りまして、石が積まれて土蔵の基礎のようになっていきます。これが江戸東京博物館所蔵の屋敷絵図のどれに当たるのかを検討しました。その結果、四谷塩町の屋敷絵図の一枚(図2)が、たぶんこの区画の屋敷に該当するのです。この図には、どここの場所ということは具体的には書かれていません。ちよつと図2では見にくいのですが、「千葉元昌の屋敷」と書いてある上に「門」とありまして、その外側に「十

二間」と書いてあります。このように出入口の側が十二間もとれる所は、塩町一丁目には南北に二列に並んでいるため、その両側以外にないわけです。

この屋敷絵図の中に、「稲荷」と書いてある四角い建物が見られます。この場所に千葉元昌という医者が、住んでいたことが文かっています。元昌は「延寿丸」という薬をつくって売っている医者でして、そこには延寿稲荷というのがあります。それと絡めて薬の効能が広まっている、と「町方書上」に書いてあります。この屋敷の稲荷はまさにこれに当たるのだらうと思います。結果として、地下室を埋めた石で組んだ基礎は、門の横の土蔵の基礎と考えることができます。すべての範囲を掘れたわけではないのですが、一九世紀くらいになってきますと、おおよそ、この屋敷図面どおりの遺構が見られます。

そうしてみますと、江戸東京博物館に所蔵されている絵図面は、遺跡の上からも非常に実際を表している資料ということになります。そこで、すべての図面の寸法をとって起こしてみますと、例えば、小さな二階建ての建物が外堀通り沿いにいくつも並んで建っていることが分かるのです。それは、遺跡で見つかる地下室の分布と非常によく似ています。ですから、地下室の上にあるという建物が建っているといえますが、

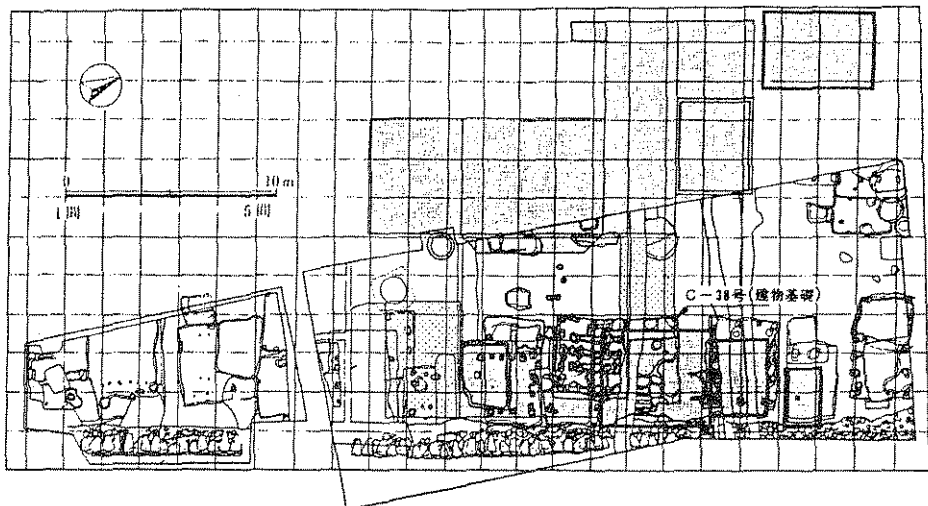


図1 四谷塩町1丁目発掘範囲

□ 平屋 □ 二階家 □ 土蔵 瓦葺き 柿葺き

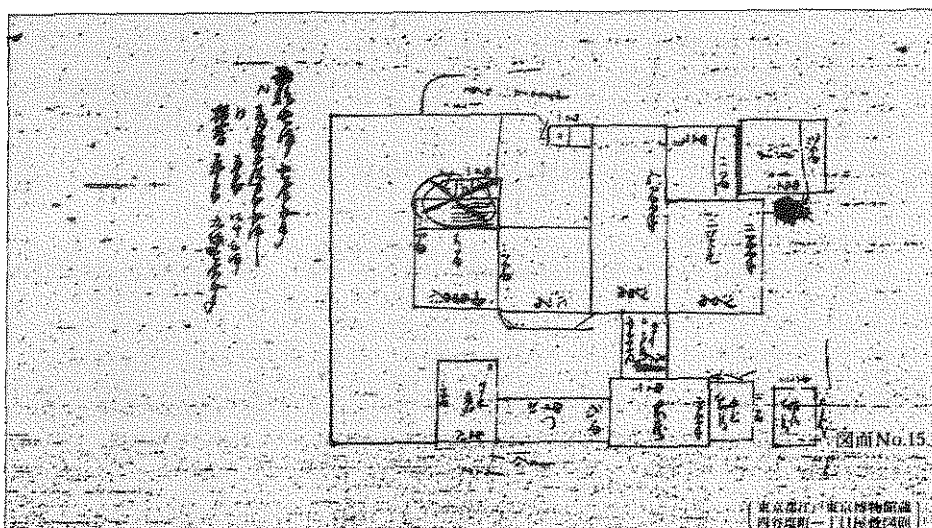


図2 千葉元昌屋敷絵図

地下がある二階建ての建物が存在していたのではないかと思います。ただし、明治四年の段階ですから、一部に土蔵が見られます。非常に立て込んでいます。ただ、奥のほうに入っていきますと、借家があったり、長屋のような建物に大工が一世帯しか住んでいなかったりと、中心部の町屋とは違って余裕がある建物の配置をうかがうことができます。これについては、赤沢春彦氏・北原系子氏が人別帳を分析されています。その中には、店借人が四谷とか市谷の旗本、御家人に何百両もお金を貸している、という記事も出てきます。それが返ってこないということで裁判になっていますから、この四谷の塩町を見る限りでは、その住民は必ずしも貧しいということはないという気がします。

以上で、「江戸の西縁」の講演を終わります。

討論

○小林 討論は、都市江戸への研究のアプローチの仕方、土木工事、住居の発掘などを中心に進めたいと思っています。

コメントーターの方をお願いしますので、のちほどコメントをいただきます。

まず、後藤さんに、法政大学の高村さんから質問がきています。内容は「一八世紀以降に展開する砂利から木杭、樽・礎石は一般的に時間の変遷による技術変革と解釈してよろしいのでしょうか。その場の立地条件（湿地やこう土）、建物の規模（重い、軽い）との関係はどうか。また、武家屋敷、町屋、農家の礎石の違いを教えてください」という質問です。

私もこのことには、興味があります。例えば、蠟燭地業というのは、幕末の頃ではないかと、以前に建築史の稲葉和也先生と話しました。松杭を多量に立てる基礎構造が、いくつかの遺跡で幕末ぐらいに出ています。これはオランダなどの影響かという気がしていたのですが、どうもそうではないらしい。しかし、松杭のあり方を見ますと、松杭の本数などが、今まで掘り出されたものより若干少ないような気がしているのです。その点も含めてお答えください。

○後藤 まず、地形的な状況が大いに考え

られます。土蔵の構造をいくつか調査をしました。土蔵に限らず、上に重たい構造物が乗るような基礎構造になりますと、岩本町の町屋遺跡でもそうですが、礎石下に杭を打って、枕木を敷いて土台木を敷くという構造が一般的でした。もともと、古い段階では杭などはないかもしれませんが。一方、台地になりますと、非常に地盤がよい関東ローム層に蠟燭石というのがあります。構造的にあのように土台はありませんでした。むしろ、木を使うと腐って落ちるという可能性もあるので、非常に固い地盤まで掘り下げて蠟燭地業にするのです。そういう構造上の特徴があります。

それから、蠟燭地業の時期的なことを申しますと、岩本町の町屋の遺跡に関して言えば、土蔵基礎が樽地業から蠟燭地業に変わるところです。一般化できるか分かりませんが、蠟燭石が使われる時期は、一九世紀の新しい時期ではないでしょうか。

飯田町では木杭が打たれています。これは、一八世紀末の寛政四年に大規模な火災があり、その復興のときに杭が打たれたことが確認されています。ですから、一八世紀末から一九世紀初頭に何らかの技術革新があったという感じを持っています。

低地での近代煉瓦づくり建築の基礎を見たり、また、近代の煉瓦づくりなどに立会いますと、必ず低地では木の杭が基礎構造

の下に打たれているのです。それで、時期を幕末とか明治とか言ってしまうましたが、今回の調査で、江戸の後半期段階に発見されたというのは、大きな成果だと思います。

○小林 ありがとうございます。岩本町遺跡は、後藤さんがお話された長屋、町屋の遺跡で、いまその結果を整理中です。報告書の出版を待ちたいと思います。

ここで、波多野先生からもご感想や質問などをお願いしたいと思います。

○波多野 例えば、今の基礎の話ぐらいでしたら、建築の歴史や技術を専門とする者なら分かっているいいではないかと、私もは叱られる立場だと思えます。ところが、東京の中に江戸時代の町屋はほとんどない。もしあっても、解体して地下遺構まで調査しないことには、基礎構造は分からない。発掘調査の成果こそ、最も重要な、具体的な状況を伝えることになります。

私は、今日、お話を聴くことができてよかったと思っています。私は、考古の人たちに意地悪な質問を度々してきました。

「なぜ遺構は地下にあるのか。もし、遺構が全部地下にあるとしたら、地球はだんだん膨らんでいるのか。あるいは、山が削られて全体が平らになって、地球はだんだんのつべらぼうになるのか」という素朴な質

問を繰り返してきました。ただ、少なくとも、江戸に関しては今日随分はつきりしました。人為的な結果として、遺構は地下に埋まったのだということが分かりました。

私は港区などの低湿地で、発掘にお付合いをしていきますが、遺構が深く、二メートル、三メートルというものもあります。古泉弘さんが「三尺下は江戸の遺跡」というような表現をされていましたが、その三尺という数字が、場所によっていろいろなのです。千代田区でも、低湿地のほうになりますとかかなり深い。逆に台地上の準町辺りだと、四〇〜五〇センチメートルで弥生の遺跡が出てしまう。なぜ遺構というものが存在するのが、やっとなぜ解けたという気がしています。

意地の悪いことをなぜ言うかと申しますと、福島県磐梯町に恵日寺という平安時代の寺院跡があります。真ん中の低地に本堂があり、周囲の山の尾根に塔頭があります。千年経っている塔頭の礎石が、今でも地上で見られるのです。そこは森の中ですから、枯れ葉が落ちて、それが土になればきつと埋まっているはずなのに、埋まっていけないのです。そうすると、やはり自然現象だけで埋まったという理解にはかなり無理がある。今日初めて、江戸というのはかなりつくられた都市なのだ、ということを実感しました。

○小林 ありがとうございます。

私から後藤さんに質問があります。さきほど、赤坂の溜池は、自然科学的な分析で一八世紀中ごろに汚水が入ってきたことが分かった、というご説明がありました。汚水が入って、その後どうなったのかをもう少し詳しくお聞きたいのですが。

○後藤 溜池の調査では、歴史民俗博物館の辻先生に参加していただき、科学分析をしました。大型植物遺体、花粉分析、珪藻分析、地質、時代を特定する火山灰の調査を総合的に噛み合わせますと、自然科学的には、一八世紀初頭に腐水環境が進行したのではないかと、ということになりました。

そのときに大きな手がかりになりましたのが、珪藻化石というものです。珪藻とは藻類の殻なのですけれども、非常に清らかな水の中で生育する種、濁った水の中で生育する種というように、珪藻の種類を分析していきますと、どういう環境の中にその珪藻が生育したのかが分かります。分析の結果、非常に濁った環境の中で生成するような珪藻が、一八世紀初頭の段階で多くあったことが分かりました。

地下鉄七号線遺跡調査では、建築史や文書、考古、自然科学の先生方と一緒に、何度も夜中まで打ち合わせをしました。その成果として、一八世紀初頭に非常に汚い埋

立てをして、宅地化したということが分かりました。この頃に腐水環境が進行したことは、開発が進み、人々が多く住むようになって、水辺の環境が汚染されたのだと思います。

○小林 ありがとうございます。

コメントーターの小沢詠美子さんから、コメントをお願いします。

○小沢詠美子

拝聴をさせていただきます。私のお聞きたいことはほとんど波多野先生が言ってくださいました。私の専門



は文献史学ですが、やはり考古学はすごいと思います。「地下三尺は江戸の華」という遺跡展を見ましたときに、目から鱗の世界でした。こういう方法で歴史学の分析ができるのかと、ショックを受けました。今後は、文献と考古とだけではなくて、都市史を研究するに当たっては、民俗学、美術、建築、国文学の資料などを、バランスよく使って、研究されていくべきであろうと感じています。

そこで問題になるのが、共通言語をどうやって見つけていくかという事です。お聞きしていますと、地下室という言い方が

多く出てきました。聴きながら、地下室はどう定義するのだろうかと思っていました。確かに史料用語としては、**廻室**というのがありますし、**穴室**という言い方もあります。どうも、植木を栽培するときに地下に掘られた穴のことは、**穴室**と言っているようです。それから、**穴蔵**という表現もあります。実は私は地下室という史料用語は、見たことがないのです。

明治になってようやく**地中室**という言い方は出てくるのですが、**地下室**という言い方は出てこないのです。それは史料用語なのか、それとも現代人が現代用語として使っている言葉なのでしょう。現代人で地下室のことを「ちかむろ」と言っている人は、一〇〇人聞いても一〇〇人いないだろうと思うのですが、そういった考古学特有の言語を、文献史学、民俗学、その他の分野とどう共有していくか。どう定義付けをして、実際にこの遺構に関してはどういう表現がいちばん正しいのか、というすり合わせをきちんとやっていかないといけないのではないかという感想を持ちました。

○小林 ありがとうございます。その通りです。若干コメントさせていただきます。共通用語は必要だと思えます。例えば、地下室は、考古学史からきた用語です。戦前、お茶の水にあります、現在の東京医科

歯科大学の辺りで**廻室**のようなものが出てきました。そのときに、今で言えば、文部省の研究者が使った用語で、それが学史的に考古学の用語として残っているのです。それは、地下にあって、ある程度の規模を持った人為的に掘られたものと、時代的な限定もなく使っています。このように、地下室は研究的にみますと、最初に考古学者が呼んだ言葉が残っているわけです。

考古学の用語は、最初にそれを何と呼ぶかで規定されます。しかし、確かに小沢さんがおっしゃった通り、今後、文献史学の方々と話す中で「自分は、こういう意味でこういう用語を使うのだ」ということを、きちんと言わなくてはいいけません。

もうお一人のコメントーター、小澤弘先生にもコメントをお願いします。

○小澤弘

江戸東京博物館の小澤弘です。私は日本美術史、生活風俗史が専門です。



都市と近郊史のお話の中で、重要な指摘があったと思います。新宿区と千代田区の事例で、近郊との境目が遺跡からはつきり分かる、というご提案がありました。また、火災や地震などのさまざまな地層の状態から、生活器具が捨

てられたりするさまざまな段階があるのだ、というご指摘もありました。

代表的な江戸の大名屋敷だとか町屋の考古的な遺物の発掘があって、考古学者がそれを調査研究する。その成果が一人歩きするのではなくて、第一段階で学際的研究がなされること、これは素晴らしいことです。江戸の町が掘られて、分かったものを数量化し、地域特性化し、時代変遷化するという作業が、これからは技術的な意味において、たいへん重要になってくるのではないかと思います。逆に、数量化によって一つの生活構造が見えてくるのではないのでしょうか。そういう意味で、単純に考古学の遺物の一つ一つ評価するのではなくて、江戸時代という長いスパンで見なければなりません。江戸時代には、火災、地震、風水害、幕末には合戦もあった時代なので、それから、そのようなことも考え合わせなければなりません。

近世考古学があるとすれば、近代や現代考古学もあるのではないかと、まさに波多野さんがおっしゃったように、どこの部分が表層なのか、すぐ下にあるわけではなくて、削られている。あるいは盛りられている。その中でいろいろな現象が起きてくるわけですが、そういう問題を含めて、全体的な把握が今後の課題の一つではないだろうかと思われます。

○小林 ありがとうございます。どなたか、ご質問はございませんか。

○陣内秀信

今日は刺激的なお話をうかがって、勉強させていただきました。



特に、江戸城があれだけ台地を改変して、盛って、本丸の高さを倍ぐらいにして、その上に天守閣をつくったお話はショッキングでした。

教えていただきたいのは、例えば、本丸を二〇メートルの高さまで、一〇メートル盛ったというようなことは、掘って地質で確認できるのですよね。そうしますと、潮見坂などは、かなり人工的につくられた空間と考えられますか。また、道灌堀などの先行するお城の構造が、ある程度あった上に、家康がお城をダイナミックにつくり直したのでしようけれども、本丸の位置がどうしてあそこに決まったのでしょうか。

築城論とか、プランニングとか、いろいろなことが想像されてきて、大変面白いテーマに結び付いていくのではないかという気がしました。一六世紀末に、このような大規模な江戸城が築かれたのは、それまでの築城の経験を踏まえた上のことと思うのです。その辺りのことは、波多野先生に教

えていただけませんか。

○後藤 道灌の江戸城は、さまざまな説があります。当時の史料に見られる江戸城の地形と記載を合わせていきますと、本丸、二の丸廻りと言われているところが、発掘調査から考えますと、本当にそうなのかという気がしています。地形的に、江戸城は、北の丸から張り出す舌状の台地と吹上のほうから伸びていく台地を縄張りしています。真ん中の道灌堀等は、本来は谷地形だった所なのです。そう考えますと、吹上の所か、本丸、北の丸の廻りのどちらかになります。平川との関連からしますと、本丸廻りになるのです。しかし、近代美術館の遺跡から、江戸城の一角ではないかと思われる遺構も出ています。本丸の盛土からは、本来の道灌の江戸城は本丸よりもむしろ北のほうにあったとも考えられます。

本丸から三の丸を一〇メートルほど盛っています。潮見坂は、本丸と二の丸を画する坂道で、当時は江戸港の鯨が見えたところから「潮見坂」と名前が付いたのです。おそらくそこも大規模な盛土をしていると思います。本丸、二の丸、三の丸とだんだんに低くなっていく傾斜地だった所を、大きな盛り土をして石垣を築きながら、本丸、二の丸、三の丸と順次下げていっているのではないかと考えています。

江戸城については、さまざまな記録や数少ない調査から考えますと、創建当時の江戸城の石垣はほとんどなく、何らかの手が加わっています。地震や災害の要因以上に、地形的な問題も考えられます。大規模に造成をして開発をしますと、反対の事柄として、崩れるということが江戸城の石垣では頻繁にありました。地形を大規模に改変して築城を行ったので、慶長期以来の石垣はほとんどないのではないのでしょうか。

○波多野 私も陣内先生と同じ感想です。平城京、平安京の碁盤目状町割りには、古代権力の大きさを象徴していると思います。地形を無視しても都市設計をするという暴力的なところが古代社会で、もう少し丁寧に地形を読み込んで、土砂の移動量なるべく減らして、というものが近世社会だ、と私はずっと考えてきました。ですから、ショックを受けています。陣内先生への答えにはなっていないのですが。

○小林 私から榎木さんにお聞きします。非日常的廃棄の回数が多いか少ないかは、屋敷を替えたり、移転したりということが背景にあるのではないのでしょうか。それが明治初頭に非常に多いということだったので、これは旗本の事例からなのではないか。それとも、四谷一丁目遺跡の長屋で

すとか町人の家の事例も含めて、明治初頭に多いということなのでしょう。

○榎木 多くの小規模な旗本や御家人屋敷では、幕府がなくなってしまうと、基本的には、明治政府に仕えるか、その場所を引き払うかということになります。ですから、それは一つあると思います。町屋については、先ほどの図面は明治四年のもので、塩町自体は、最大時で二〇〇世帯、八〇〇人ぐらいが住んでいたと言われていますが、明治四年の段階では、一五〇世帯、五〇〇人ぐらいにまで下がってきています。これは、明治になっての急激な変化というのではなくて、それより前から徐々に減り始めているのです。クリアーな情報がなかなか出てきません。

○小林 分かりました。ありがとうございました。千代田区や新宿区の事例のように、個別の遺跡をきちんと発掘していきますと、地域の歴史に提言していきます。今のところ、四谷の一地域や、江戸城の一部もありませんが、各區で積み重ねていくことによって、いままでは「おおよそ概略はこうなのかな」というイメージで話されていたものが、実際の資料から、江戸城はこうだった、幕末から明治の町屋の生活はこうだった、こういうふうに変わらなかった、こ

の段階で変わる、ということを提示できるようになると思います。考古学の資料から説得力ある形で発言していくことができるようになります。近世考古学では、現場を非常に大事にして、現場からものを考えていく、一つの遺物、一つの遺構を大事にして、そこから地域を考え、都市を考えることができます。そのことを、今日、示していただけたと思っています。

波多野先生からも、一言お願いします。

○波多野 実は、考古学という学問には少し問題があります。科学というのは追実験ができません。ところが、ある発掘調査について、同じ体験を同じ場所でもう一回見せてくれと言われても、多くの場合、遺構はすでに消滅してしまっていて不可能です。掘っている人は、ものすごくたくさんのことを感じている。ところが、感じていることが本当に書かれているかというところ、報告書ではかなり遠慮していらつしやるのではないか。後の人が見ても書けないのですから、報告書のページの色を変えてでもいいから、大胆なことを書いてほしいと思います。これが私の期待です。

○小林 今日は会場に小木新造先生にもお越しいただいています。一言いただいで、フォーラムの締めになりたいと思います。

○小木新造

今日うかがっていただいて、文献史学はもっと勉強しないといけないことが分かりました。



江戸東京フォーラム委員会、波多野さんが今日のこの企画を三〇分ぐらい堂々と述べたのです。なぜかと聞くと、「近世考古は、すごい」とおっしゃる。自分のほうの建築史は、「勝負にならない」とおっしゃるのです。近世考古学には、新しい面というのがたくさんある。けれども、いちばん大事なのは、文献史学の裏打ちをしていくことだと思っています。

「学際研究を大いにやっこう」というのが、我々の研究会、江戸東京フォーラムの最初からの趣旨でした。そういう形でやってきたことは間違いではなかった。こういう形ができて、いろいろな学際領域の研究が盛り上がってくれば、本当のことが分かってくると思います。でも、いちばん大事なのは、自分の専門というものを生かすことです。これを忘れてはいけないのではないかと、ということを感じました。

○小林 ありがとうございました。これで、第一四五回、江戸東京公開フォーラム「遺跡から江戸の生活文化を探る—江戸考古学最新情報—」を終了いたします。

■江戸東京フォーラム話題一覧

() 内の所属は話題提供時のもの

1986年7月～12月

- 第1回 江戸東京フォーラム委員会の進め方と話題提供……………小木 新造 (歴史民俗博物館)
 第2回 都市下層社会の形成と変容……………内田 雄造 (東洋大学工学部)
 第3回 やわらかい都市構造……………陣内 秀信 (法政大学工学部)
 第4回 考現学の考古学……………佐藤 健二 (法政大社会学部)
 第5回 明治期の道路 (街区)・路地の幅員基準について……………石田 頼房 (都立大都市センター)

1987年1月～12月

- 第6回 博覧会と盛り場の明治……………吉見 俊哉 (東京大学文学部)
 第7回 明治期の繁華街の建築……………初田 亨 (工学院大学)
 第8回 東京の土地・住宅史……………長谷川徳之輔 (建設経済研究所)
 第9回 江戸の構成と構造……………加藤 貴 (北区教育委員会)
 第10回 水の都・深川成立史……………吉原 健一郎 (成城大文芸学部)
 第11回 江戸の建築技術……………西 和夫 (神奈川大工学部)
 第12回 松浦武四郎の一畳敷の書斎……………ヘンリー スミス (コルビア大学)
 第13回 徳川の旧家臣のみた、江戸・東京……………井上 勲 (学習院大文学部)
 第14回 路上から見た江戸・東京……………藤森 照信 (東京大学生産研)
 第15回 東京書物探索入門……………大串 夏身 (都立中央図書館)
 第16回 神田のサウンド・スケープの研究……………鳥越 けい子 (法政大学)

1988年1月～12月

- 第17回 絵画史料にみる江戸の町……………波多野 純 (日本工業大工学部)
 第18回 明治期東京の飲料水販売……………松平 康夫 (東京都公文書館)
 第19回 江戸城御殿の室内空間について
 一障壁画下絵による復原一……………西 和夫 (神奈川大工学部)
 第20回 小江戸・川越のまちとすまい……………内田 雄造 (東洋大学工学部)
 第21回 現代東京の祝祭……………松平 誠 (立教大学)
 第22回 丸の内の変遷とそこに働くサラリーマンの職と住……………岡本 哲志 (岡本都市建築研)
 第23回 浅草寺の境内・門前世界……………竹内 誠 (東京学芸大学)
 第24回 都心定住を考える一市街地の「町」の現代的意味一……………奥田 道大 (立教大社会学部)
 第25回 都市社会調査の歴史から……………佐藤 健二 (法政大社会学部)
 第26回 世界都市東京の光と影……………町村 敬志 (筑波大社会科学)

1989年1月～12月

- 第27回 都市の語り出す物語……………宮田 登 (筑波大歴史人類)
 第28回 江戸の都市計画一江戸前島を中心として一……………鈴木 理生 (区立京橋図書館)
 第29回 江戸の武家屋敷について……………北原 糸子
 第30回 江戸の被差別・東京の被差別
 一もうひとつの江戸・東京一……………大串 夏身 (都立中央図書館)
 第31回 江戸東京の遊び一かるたを中心に一……………村井 省三 (村井かるた館)
 第32回 森 鷗外の都市論……………石田 頼房 (都立大都市センター)
 第33回 東京都心部における空間利用形態……………山下 宗利 (筑波大地球科学)
 第34回 「響き」としての東京の街なみ一神田地区における
 建物の形態が道の音環境に及ぼす影響を中心に一……………鳥越 けい子 (サウンドスケープデザイン)
 第35回 東京の都市構造の変容とアジア系外国人問題……………奥田 道大 (立教大社会学部)

1990年1月～12月

- 第36回 鶴屋南北の幽霊……………横山 泰子 (国際基督教大学)
 第37回 東京と近代詩……………行吉 正一 (江戸東京博物館)
 第38回 同潤会うぐいす谷アパートの建て替えをめぐる
 一マンションの老朽化と建て替え問題一……………内田 雄造 (東洋大学工学部)
 第39回 東京の地価……………前田 尚美 (東洋大学工学部)
 第40回 江戸の地価……………伊藤 好一 (関東近代史研究家)

- 第41回 江戸のごみ処理……………伊藤 好一 (関東近代史研究家)
 第42回 都市農業と土地問題……………石田 頼房 (都立大都市センター)
 第43回 天皇巡幸と「帝都」としての東京……………吉見 俊哉 (東大新聞研究所)
 第44回 江戸の名所・王子……………加藤 貴 (北区教育委員会)
 第45回 上水からみた江戸の都市計画……………波多野 純 (日本工業大工学部)
 第46回 江戸名所絵における遠近法……………ヘンリー スミス (JILIA大学)

1991年1月～12月

- 第47回 江戸図屏風にあらわれた風俗……………丸山 伸彦 (歴史民俗博物館)
 第48回 鍬形恵斎の江戸一目図屏風……………小澤 弘 (調布学園女子短大)
 第49回 見立絵というもの……………鈴木 重三
 第50回 江戸住宅事情……………片倉 比佐子 (東京都公文書館)
 第51回 江戸・明治・大正のすまい……………平井 聖 (昭和女子大学)
 第52回 最近の自治体住宅政策について……………林 泰義 (計画技術研究所)
 第53回 東京市営住宅事業について……………内田 青蔵 (東工大附属高校)
 第54回 東京における水際土地利用の変容
 ー日本橋川と隅田川を中心としてー……………岡本 哲志 (岡本都市建築研)
 第55回 江戸から東京への景観構造変化……………窪田 陽一 (埼玉大学工学部)
 第56回 東京都の都市計画と河川運河……………昌子 住江 (関東学院大学)
 第57回 アジアのスラムと居住へのたたかい……………内田 雄造 (東洋大学工学部)

1992年1月～12月

- 第58回 新宿ヤミ市の復原……………松平 誠 (立教大学)
 第59回 鍬形恵斎筆の「黒髪山縁起絵巻」と「江都名所図会」を
 めぐって……………小澤 弘 (調布学園女子短大)
 第60回 芝居町と観客ー都市文化の底流をさぐるー……………小木 新造 (江戸東京歴史財団)
 第61回 「よ組」を中心とした江戸火消しの活動……………鈴木 栄一 (千代田区議員)
 第62回 近代演劇人による伝統の発見……………横山 泰子 (国際基督教大学)
 第63回 博覧都市江戸東京……………吉見 俊哉 (東大新聞研究所)
 第64回 読売から新聞まで……………GERALD GROEMER
 第65回 音の風景と近代の忘れものー大分県竹田市
 瀧廉太郎庭園整備計画をめぐってー……………鳥越 けい子 (サトウ・スケープ機構)
 第66回 三越百貨店が演出した文化生活……………初田 亨 (工学院大工学部)
 第67回 ヴェネツィアの経済空間ー交易・市場・職人ー……………陣内 秀信 (法政大学工学部)
 第68回 都市のまつり……………宮田 登 (筑波大歴史人類)

1993年1月～12月

- 第69回 江戸、初期の土地問題……………吉原 健一郎 (成城大文芸学部)
 第70回 江戸勤番武士の生活……………竹内 誠 (東京学芸大学)
 第71回 江戸のおんな……………杉浦 日向子 (江戸風俗研究家)
 第72回 大名屋敷跡地の住宅地開発ー麻布霞町の場合ー……………加藤 仁美 (跡見学園短大)
 第73回 新説・日本近代住宅史……………藤森 照信 (東京大学生研)
 第74回 幻の東京オリンピックと万博……………磯村 英一 (東京都立大学)
 第75回 東京市社会局と都市社会調査……………佐藤 健二 (法政大社会学部)
 第76回 近代における東京の都市庶民住居の発展……………江面 嗣人 (文化庁文化財)
 第77回 江戸の町と京都の町……………小川 保 (清水建設(株)技研)
 第78回 「まち」の死に立ち会うときー汐入をめぐってー……………伊藤 毅 (東大工学部建築)
 第79回 谷中墓地をめぐって……………森 まゆみ (谷根千工房)

1994年1月～12月

- 第80回 首都の葬送空間ー江戸・東京の火葬場と墓地ー……………八木澤 壮一 (東京電機大学)
 第81回 葬式のフォークロア……………宮田 登 (筑波大歴史人類)
 第82回 東京ー極集中と今後の課題
 ーより豊かな都市空間をめざしてー……………東郷 尚武 (東京市政調査会)
 第83回 東京都政の50年……………大串 夏身 (昭和女子大短大)

- 第84回 博物館の住宅展示を考えて
一人々は生活史をどうみるか……………ジヨウガン サト
- 第85回 都市空間とセクシュアリティ……………上野 千鶴子 (東京大学文学部)
- 第86回 メディアとしての絵はがき……………佐藤 健二 (法政大社会学部)
- 第87回 メキシコシティと東京の間で……………吉見 俊哉 (東大社会情報研)
- 第88回 北京と東京の比較都市論
一歴史的空間構造と近代化のメカニズム……………陣内 秀信 (法政大学工学部)
- 第89回 川越のまちなみの復元……………内田 雄造 (東洋大学工学部)
浅井 賢治 (東洋大学工学部)
- 第90回 河鍋暁斎と江戸東京……………小木 新造 (江戸東京歴史財団)

1995年1月～12月

- 第91回 都市と美術館と絵画ーパリ・ロンドンと日本ー……………小澤 弘 (調布学園女子短大)
- 第92回 野村コレクション「小袖屏風」とその周辺……………丸山 伸彦 (歴史民俗博物館)
- 第93回 終戦直後の東京の生活をさぐる資料……………天野 隆子
- 第94回 歌謡曲のなかの東京……………大串 夏身 (昭和女子大短大)
- 第95回 江戸の着物文化……………田中 優子 (法大第一教養部)
- 第96回 江戸東京学への招待試論……………小木 新造 (江戸東京博物館)
- 第97回 「境内」からみた三都
一三都の比較都市史序説……………伊藤 毅 (東京大学工学部)
- 第98回 盛り場考……………神崎 宣武
- 第99回 近世都市空間の創出過程について
一都市構築の基盤材調達の視点から……………北原 糸子
- 第100回 江戸東京学への招待……………小木 新造 (江戸東京博物館)
一生活の舞台としての都市空間……………陣内 秀信 (法政大学工学部)
高階 秀爾 (国立西洋博物館)
田中 優子 (法大第一教養部)
司会: 内田 雄造 (東洋大学工学部)
- 第101回 都市の民俗学ー色・音・匂の変化……………小林 忠雄 (歴史民俗博物館)

1996年1月～12月

- 第102回 同潤会柳島アパートの生活……………大月 敏雄 (東京大学工学部)
- 第103回 同潤会による復興まちづくりと普通住宅建設に
ついて……………佐藤 滋 (早大学理工学部)
- 第104回 住文化の体験の場としての博物館……………小澤 紀美子 (東京学芸大学)
- 第105回 縁切寺ー東慶寺と満徳寺……………高木 侃 (関東短期大学)
- 第106回 考古学からみた江戸と他都市との比較……………小林 克 (歴史文化財団)
- 第107回 日本パノラマ館と凌雲閣ー浅草の2つの巨大建築は、
当時の人々にどのような印象を残したか……………平井 聖 (昭和女子大学)
- 第108回 震災復興<大銀座>の街並みから……………石川 幸恵 (清水建設総務部)
- 第109回 明治初年の大火と貧富分離論……………石田 頼房 (工学院大学)
- 第110回 戦災復興計画の理念とその遺産ー東京、仙台、
名古屋、神戸、広島等をめぐって……………越沢 明 (長岡造形大学)
- 第111回 関東大震災後の東京の住宅地形成について……………藤岡 洋保 (東京工業大学)
- 第112回 カフェーと喫茶店……………初田 亨 (工学院大学)

1997年1月～12月

- 第113回 橋のアーバン・デザイン……………伊東 孝 (日本大学)
- 第114回 城下町大坂、江戸の都市設計……………篠原 修 (東京大学工学部)
- 第115回 東京都都市景観マスタープラン
ー新たな景観まちづくりへの展開……………布施 六郎 (東京都)
- 第116回 江戸・東京の湯屋……………松平 誠 (女子栄養大学)
- 第117回 江戸城から宮城へ
ー皇居を中心とする都市空間の変容……………米田 雅子
- 第118回 江戸藩邸物語……………加藤 貴
- 第119回 建築家、佐藤功一と都市への視線……………米山 勇 (江戸東京博物館)

- 第120回 明治の歌謡にみる東京……………大串 夏身 (昭和女子大短大)
 第121回 「江戸名所図会」と長谷川雪旦……………鈴木 章生 (江戸東京博物館)
 第122回 町奉行所・定火消屋敷・聖堂・上水
 ー絵図・図面にみる江戸の都市施設ー……………波多野 純 (日本工業大学)
 第123回 参勤交代ー巨大都市江戸のなりたちー……………原 史彦 (江戸東京博物館)

1998年1月～12月

- 第124回 寛永13年江戸城外堀普請と周辺地域の変化……………榎木 真 (新宿歴史博物館)
 第125回 関東・東国の部落史
 ー部落史の「見直し」論議に引きつけてー……………藤沢 靖介 (部落解放研究所)
 第126回 明治期の被差別部落
 ー都市東京と植民地主義の言説編制からー……………友常 勉 (部落解放研究所)
 第127回 関東大震災と朝鮮人虐殺事件……………石田 貞 (埼玉同和教育協)
 第128回 原宿の空間構造ー人気の秘密を歴史から読むー……………柳瀬 有志 (法政大学工学部)
 第129回 横浜市の市営住宅事業について……………水沼 淑子 (関東学院女子短大)
 第130回 目白文化村とその変貌……………八木澤 壮一 (東京電機大学)
 第131回 住総研創立50年記念公開フォーラム……………小木 新造 (江戸東京博物館)
 地域学の明日を考える
 橋爪 紳也 (京都精華大学)
 結城 登美雄 (まちづくりアソシエーション)
 森 まゆみ (作家)
 司会:陣内 秀信 (法政大学工学部)

1999年1月～11月

- 第133回 東京・明治大正の人口問題……………小木 新造 (江戸東京博物館)
 第134回 江戸東京フォーラムと住総研……………大坪 昭
 墨壺 (伝統的な) の履歴書……………吉田 良太
 第135回 「ふるさと」としての東京深川ーある個人的な感想ー川田 順造 (広島市立大学)
 第136回 都市と農村の蜜月時代
 ー近郊農業の展開と流通の変化ー……………江波戸 昭 (明治大学商学部)
 第137回 永井荷風と東京……………湯川 説子 (江戸東京博物館)
 第138回 公開市民フォーラム……………立壁 正子 (「ここは牛込、神楽坂」)
 地域雑誌からみた町
 野口 由紀子 (「武蔵野から」)
 大野 順子 (「まち雑誌 千住」)
 司会:森 まゆみ (谷中・根津・千駄木)

2000年1月～12月

- 第139回 「ニュースの誕生」展と江戸東京学……………木下 直之 (東大総合研究博物館)
 北原 糸子 (東大社会情報研究所)
 佐藤 健二 (東京大学大学院)
 吉見 俊哉 (東大社会情報研究所)
 富澤 達三 (神大常民文化研究所)
 第140回 長崎出島の復原と「海を渡った大工道具展」……………西 和夫 (神奈川大学)
 千野 香織 (学習院大学)
 波多野 純 (日本工業大学)
 第141回 大久保にみる都市の国際化……………稲葉 佳子 (南ゾオ・アソシエーション)
 第142回 神田多町ー震災復興の「まち」から見えるものー……………小藤田 正夫 (千代田区まちづくり公社)
 第143回 築地・横浜の外国人コミュニティ……………森田 朋子 (お茶の水女子大学)
 第144回 江戸東京フォーラムの果たした役割……………太田 博太郎 (日本学士院)
 小木 新造 (江戸東京博物館)
 陣内 秀信 (法政大学工学部)
 第145回 遺跡から江戸の生活文化を探る……………波多野 純 (日本工業大学)
 ー江戸考古学最新情報ー
 後藤 宏樹 (千代田区立四番町資料館)
 榎木 真 (新宿歴史博物館)
 司会:小林 克 (江戸東京博物館)

江戸東京フォーラムについて

江戸東京フォーラムは1986年5月に住宅総合研究財団の助成研究として発足し、7月に第1回フォーラムを開催した。翌年度から、財団委員会活動として、現在に至っている。

当初の委員会は、小木新造（江戸東京博物館顧問）を委員長に、委員は内田雄造（東洋大学工学部教授）と陣内秀信（法政大学工学部教授）であった。メンバーは、建築史・都市計画・歴史学・民俗学・社会学等の研究者等が中心である。

江戸東京フォーラムの目的は、都市機能が雑然と混ざりあって、極めて輻輳した多重構造都市・東京を、江戸から今日までの都市形成の発展と、文化変容の過程を一貫した視座から学際的にアプローチすることである。

具体的に、次のようなことを行った。第1は、文化発信都市「江戸東京」を浮世絵や屏風絵の史料から多角的にアプローチし、祝祭、娯楽、風俗、モードやメディアにあらわれる都市の文化的様相を読み解いた。第2は、江戸開府と共に始まった都市計画は柔軟で固有な都市を形成してきた。その歴史的連続性と都市の経験を問い直し、生活空間としての都市のコスモロジーとアメニティを考えた。第3は、江戸東京に住まう人々は、いかにコミュニティを形づくってきたか。生活の場としての住居、境界での人づきあい、土や緑や音の風景と環境の移り変わりを見つめ、大都市のまちづくりのこれまでとこれからを再考した。

成果は、住宅総合研究財団の助成研究として、「住総研研究年報」14号（1988年）に、財団の委員会活動として「住総研研究年報」18～24号（1992～1998年）に報告をした。また、当財団機関誌「すまいろん」の住総研 NEWS LETTER のページでも報告をしている。

第60回には「江戸東京を読む」を記念出版し（筑摩書房、1991年）、あわせて、特別フォーラム「芝居町と観客」（講師：小木新造）を開催した。第100回にも「江戸東京学への招待」と題して、文化誌篇、都市誌篇、生活誌篇の3分冊を出版し（日本放送出版協会、1995、1995、1996年）、同テーマで記念フォーラム（講師：小木新造・陣内秀信・高階秀爾・田中優子、司会：内田雄造）を開催した。

第131回（1998年）は、住宅総合研究財団創立50年記念フォーラム「地域学の明日を考える」（講師：小木新造・橋爪伸也・結城登美雄・森まゆみ、司会：陣内秀信）を公開フォーラムとして開催した。以降、年1回、公開フォーラムを実施している。1999年は第138回「地域雑誌からみた町」（講師：立壁正子・野口由紀子・大野順子、司会：森まゆみ）を、2000年は第145回「遺跡から江戸の生活文化を探る－江戸考古学最新情報－」を公開フォーラムとした。

現在、委員会は当初からの小木新造、陣内秀信の他に、1998年度から波多野純（日本工業大学）、森まゆみ（作家）、横山泰子（法政大学）、吉見俊哉（東京大学社会情報研究所）で構成し、より学際的なフォーラムを目指している。

フォーラムを企画するにあたり、委員会では企画の基本柱をつくっている。その基本柱は、(1)「記憶」としての都市、(2)「地域研究」の掘り下げ、(3)文化学・都市文化学で「1920～30年代をきる」、(4)情報網の構築を江戸明治に学ぶ、の4つである。

21世紀の「都市の時代」に向けて、江戸東京フォーラムは東京のあり方を総合的都市研究として今後も取り組み続けたい。

「遺跡から江戸の生活文化を探る －江戸考古学最新情報－」

2001年3月31日発行 ©

編集＝江戸東京フォーラム委員会
発行人＝峰政克義
発行＝財団法人 住宅総合研究財団
〒156-0055
東京都世田谷区船橋四丁目29番8号
Tel. 03-3484-5381 Fax. 03-3484-5794
E-mail: suzuki@jusoken.or.jp
URL: <http://www.jusoken.or.jp/>
印刷所＝株式会社 七映

住宅総合研究財団について

当財団は、1948(昭和23)年、当時の窮迫した住宅問題を、住宅の総合研究、および成果の公開・実践・普及によって解決することを目的に、当時の清水建設社長・清水康雄氏の私財の一部を基金として設立された財団法人である。以来50数年、現在は住宅に関する研究助成事業を中心に、シンポジウムの開催、機関誌「すまいろん」の発行などの活動を続けている。

- ・基本財産 23億5,900万円(2000.3現在)
- ・年間事業費 8億円